河海抄

内閣文庫

番號	和 27263	
冊數	10	(2)
函號	203	17

内閣文庫
和書
類 號 二七二六三
冊 一〇
架 二〇三 函 一二

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

河海抄巻第三

第三　若紫

正六位上物語博士源惟良撰

（巻名）

ていつらく いたしかとえんしふれ給ひかなひあなし[illegible]の葉

さうてうやうこりうらい給ふ　瘧病　ワラハヤミ二君　俗云衣病也

瘧　瘧疾　二日一發

万 或山寺に[illegible]しるしかしこき

きた山　向南山　万葉

こゝに山のたなひく雲かゝるとも此かしこ出て前て

此ある鞍馬寺首ハ四十九院あり仏法感地とく

河原院をうつして此院と云同也

さてやまの流出られ給ふて御[?]人のそてうちやしめん

和学講談所
日本政府図書
明治十二年購求
内閣文庫

国立公文書館 National Archives of Japan

此哥につきてある物かたりハ志賀のちかひと云説あり　歟（しが）事二
難波のみやかりし後少納言我孝子にてある或日説云
治部大輔（従四位下治部大輔子武智丸孫）藤原伊勢人桓武天皇御宇造東寺長官所謂
用者於鴨河原放矢尋処登山於鞍馬沙門天始建立此
寺云々　水鏡云延暦十五年　伊勢人（藤原）と云人きぬ鞍馬の寺作れる
しかへわたく住みにけるしかり
志てさかへしつる時ハうたて侍りと
為發（シヲユラナス）或説　世俗のきこえをひきかえとりて
めしあけられし為除の中花をいちりても申わたしたるにも出かくせとや
きれハ　庵死（ウヒカニニル）白氏文集　老屈　圓融院御右大臣の御時

右天台座主慈恵僧正養老病并術也于斎再三後任右
参入于加持帰滅御云々
三月つこもりかた近く　風もおしむへし自餘の月も同じ　定家傍
京の花さかりハ人すミすきうら山のさくらハまたさかりなる
而るに此花ハちりはてぬよしの山の桜ハまたさかりなる人
里を又まちうろそかしと吉川の山の桜をまて風たる　私注
ときろせさいあむなく　ひろさ定云々　而とせさいあへぬとなり
いかさいハ此はかりわれ判官弁なり
いかすむ岩かの中にすむとてハ世のうきことのきこえこさらむ
佛弟子須菩提住西天石窟　呉競云陳思王遊山忽聞岩厳

裡有誦経聲遠寥亮使解音者一聞し為神仙し為道
士初之作歩虚寒山詩云　余家有一窟窟中無一物
あんかこれかこみひを　　孫方　修孫や
さわつきかんつりてよそをり　　竹付　よそへのまとろや世俗し煩
いそとさきいろてしいかり
名もこのはしらおりぬしとよ　　盤折（ツヅラヲリ）　通岩巌　嶺巓　白氏文集
挫悟ちう
蹴陜　或九折　清少納言枕草子に紙くしてつゝらをりとあり
ぬのはしらおり（ツヽラヲリ）
きよみはやまし　　屋廊
みるし偈頌　芝忠僧都　号小山僧都見宋花物
あり屋の山　円好　秋水後秋山終日蕭を吹屋雨　紀納言

長谷雄卿作
ひとめにに　他国といふ　え翁きにハわしらおほり
偈頌物絶云人れ国中もも捨つる半屋後ありけれ
命しれ山ふうしれ安ち　大峯　猿遊岩人富士山ふ射楊
せ風たりき嶺や云て
宗れいゐりかき二夜叉ゐけ迷も　阿曲　文限
捨かひりの屋前に偽り　寛ひろきえ　地蔵虚空蔵　宮内集
ひろしれ乃ちかくれの捨ふひふわりねとかし浪のたち
さされかし志ふちれじとわ　明石入道　於殺意ハ於て殺い
ふく於殺心の義や　経に於殺菩薩といふなし

いにしへかし斤販麻呂とかうよしあり
いなかしらとみえたりあるひとの　おもおもやとも立おなとなとすへなり
ららえ
新撰集
いまそかりおもひそめけるかなとそや
近江比中将とて中納言ありけるにさうらひし
藤原實方朝臣長徳元年正月十三日辞左中将任陸奥守
かれは人をもてなしあるかこころまちて
あれのありけるかくる　面白
まうけてまゐる山まいりともせよ　奥白もて　文選に　奥
家をおさとなかりけり　茂家云　奥白也　是も山かきかかり

さいつころ　近習　やうのさいつころはしもありけるは一時ころかれさこえうり
それそれに徐なり　義多　日本紀　多　白　若干　日ころ
ふかく　云二
けしきはありなかるらんと　摽　人摽　風摽落　白見
いきいかりけむ日ハへぬるらんもとは人をみて侍く
らへ人なりおもしかりありえさるすまいり
推古天皇十一年十二月戊辰朔壬申始制冠位十二階各有
差十二年春正月戊戌朔始制冠位於諸臣各有差　是叙位始也
是故此准八義宜制爵位其本者天也紫冠為一忠者日也錦
冠為二仁者月也繍冠為三常者星也纏冠為四義者辰也緋

冠為五礼者聖也深緑為六智者賢也浅緑為七信者神也
深縹為八祇者祇也浅縹為九其地者毋也因号立身黄冠
為十月今以格永為恒式 以上前代旧事本記 かくのことく爵を
賜や五位より爵位の初や故紀にみえてありて凡一位より初位まて
合て九品あり これに中位上下と分ハ三十階也五位以上ハ勅授とて
君よりみつからし位つかさ云從七位已上奏授とて大臣以下おもむ
らしく奏聞すなうり八位初位ハ判授とて奏聞にもおよはなく
太政官相判也初て五位に叙するを叙爵とも冠位ともいふ
なり 想ハ三十階の名にてこれとと出でハ初位の称と云也
能中首ハ緒笠といふものと冠にて是ハ末にさうひく色を此

紋あるも大織冠なとハ其比の正一位にあたるなりその後正一位二
位といふ事ハ未来や文との浅からぬ冠と云するハ淨の原
天皇の代よりさたまりたり
うちこもりとうこうハ　幼童や
みさけうまく人をなつかしく思へは　のちくの四月の日といふなり
豪商ハみの事とよくうり見ると云て人をうつ云是信用
ちふつさ人はおくまつり　物佛
いねさき　犬公　上東門院ノ上童にはなありて菜花の物語にえて
よりは御花にもおそまつきとあるさハ公の事也又若せ
位にあるまかハさうさといふあり一宮なと一宮といふなり　内裡

女房の名をは上臈とハ何房中下とハ何君とかいふや
ほはまかる名ことをしてさいふ成就ことそ
叓 日本紀 文選
まかれこころへ給ひけるハつしう流也
新撰字鏡 竹は戒経
つゝほさしおのやいと狭き女せまく 類苅 亮
日本紀にあくよしあらう 雉
うきそつけいんおかりうらあかハまかいやれ成りける 薫
うらかや
新ひたゝし 綱紗

かくつやしく 巌 文光
あひたんありかもこ久しき草をおきて涙落てうらむるすら
雉草 日本紀 ともとへとうかほすを帰を我方にせ成
なう
しゝりおかしきまし成 ヨキリ 毛さとこおりしまし
うきいしく 萼文
草の法也しうを 樹下集 うれかしのいとかれ庭よあまりし
草のしろとよやきらん
天台大師の法花日に慈恵僧正し源く千僧賛一必や草

いなし　　ふ審

梅宮大納言　　養老三年始置梅宮使

のられのとのゐこゝろを聞しるしせ行りつれとハ

泥(ナイリ)梨底へつるし　水原抄ニ天せり説只捺在此徐こと

ここしゆし

おもハれさうしつよし　　進(ナカシラコロ)ノ万象

右

さうしニ及ハ人よりさしれ象清きやうく宿ニそつらう物ぬき

(六帖)婦の比ゆくり秘蔵くんと底へ花の色をたゝそうしらに打く

○おきのしところしまうりて

凍傷せのなかみもりしハありて下心わすこゝろ点比別セよまへ

さしれ常にそくり見さるへきうへとと

抱墓みえさし比きしそのあとふあはれくうくつきてそ下よ

くあまを

すくしおりこゝく　　退や

佛比此土底へたとへそこゝいりても　　(阿弥陀)泥冥入於冥永不聞仏名

あさきやうりと　　あさくたうすゝ不死

こゝろをしてしまうらゆつく

ゝ

い前比示せしまハ卿かうしつくこの常に見ハとあらうまれゆよ云

阿耨三昧やうまふゆゆしれせん(職阿)かしのあまた　　三昧乃梵語や

此云正受又名正見法華蔵法南岳大師所行法ツヤ
こゝに袖ぬらしゝ法　さしもよかすみ庭そとふや
侍りし人此雪中乃あれつゝかゝりよさし宿も物を儚かりける
かりしさとし花風としつ桜風よ
花乃ちりしさとし花ちりてふみちまくれしこ庭とふみて
あしも　儀方
うきよを愛れいとしいふりしもそ兎ひらき風と
遊落ちきを愛れちくつゆひらき風とて花人の愛つなよ
のこたうちとろ之
あかねさし物つゆくことよみたく侍り　池邊花ハ梵語之龍ゝ

うどん華此花もちらぬみつらしそ三山法つゆまめてもとるかめ
天台云優曇華三千年一現々則金輪王出云々
文句云優曇華者翻云郎曇鉢華龍爲臨應華金輪
王出海水減少金輪路現此花乃生作金輪王々先地靈瑞華
似蓮華故云疑云法華無量劫難図辟如ゝゝ者有所若三千
年ゝ此華現者何爲靈瑞乎答云八家此華開時々暦三千年
欲毎三千年非云出現華々曇華ハ輪王出世の瑞や故号
靈瑞華人壽八万歳時節金輪王還四列之時法ある半減よりに
しりて此花の現せ風かり是を光源氏を行えて思ふまれける
かり詞よ附ありて一つ々ひ紛いかり風とも風を法華比久宿附

一現れいろく

いまよりまことうく出る所　楞鉛

僧都さしたし太子のくわへまり元所へつたわる出ん（百済）（金）

（劉子）かうしれまし乃さうやくしる所

本朝神仙傳　江帥匡房撰　曰上宮太
子者用明天皇之子也母后妃當其夢有一金人曰欲託君胎以弘
佛法誕生之後自少小時聖德被天下神異遍海内遣小野妹子
於唐衡山先身持經取他經來太子閉戸入定一旦覺之後而出吾
進遣魂神所覧渡や　半日之間渡万里滄濱後彼山僧曰某日
金人乘空來取此經聖象圖遶雲西路香宜　畧折　欽明天皇
御宇聖德太子六歳冬十月自百濟国經論律師禅師比丘尼下

とはりて持しれ寺なとにあるしまつ所なし　但太子金剛子念珠
良傳以下にも所々にあるし或人云法隆寺に太子の流布あるしるの此中
しれ念珠幾三連ありて其中金剛子念珠一連ありし又法隆寺の縁
起にもとめてしらるし
あらこる所袋に送　一万聚に舎利袋のさきハ多くのあまり
あしろいさハえてしハこ詞の多きんとありてりハ玉やあらの袋
ハすこる袋つりこちるところの者桐通て縁帯や
大栗ね枝よつ多さ出んあまりれつよれ々そうともあくく
吉布絲ハ勅るちれ総字や勅る吉布絲の中間に僧正荅と
云ありし京師伝の働る寮に淡れ地之右し流布に組瑠璃盤

とおしめ法僧都の送物よ北臺ヨ菜也今もなうも醫三時菜
まつりいよそくふうやく
ゆおくり物　贈物　雲漢井池外羈中贈風檣漢法浪上舡
朗詠
ゆふいまへ　向夕来　遊仙窟
その中ねとしも此方のふしすうやし
可津良文の天良絶末江名留や追与良比天良比介し奈留
や江波波井介し良太万し津久やし良太まし津久や於久
止し止をしつと天波久介曽左の江元や和仔戸曽止美世毛
世於と久止し元長也し於く久長也し長也　催馬楽葛城

ひちりきあしもいしひさてし此方元をあせしはまし物
篳篥　立禾橋花奏　笙　説文曰笙十三簧ハ象鳳之身笑曰列管
ハ象鳳羽翼也或曰鸞鳥羽翼鳳音　尓雅曰大笙謂之簧ハ郭漢
曰列管匏中施簧端列仙傳曰王子喬好吹笙作鳳鳴鸞鄭談
通云之杏嬌笙　設曰形寫歌鸞翼聲随簫鳳象
僧都哭ととつりしもらてまいりて
琴操曰伏犠作長三尺六寸六分大象三百六十日也広六寸象六合
や文上曰池下曰岩池水平前廣後狭豫下　上圓下方法天地
五絃官也大絃君也寛和而温小絃臣也清廉不亂文王加二絃合
君臣恩也宮為君商為臣角為民徴為吏羽為物也　琴書曰

自堯元相傳善琴者八十餘様雖廿有差大體相似皆長五尺六寸
法碁之類也上圓而欲象天也下方相平法地十三徽配十三律餘
一象閏也 本文絃宮商角徴羽也加絃文武也 至後漢蔡邕又加
絃象九星在人法九竅 清（天武）御原吉野宮にて日暮に琴をひき給し
て給ふ時に前の山のほとりに奇雲 簁草里神女降て曲に隨ふて
袖をあげ舞ふ五廻 天皇此外の人に見えずていふ をとめこがをと
めさびすも からたまを たもとにまきて をとめさびすも 是五節舞
觴也 在之通女参 此器曲上古渡来本朝之條爲縁也允恭
天武以下令弾給之 曲見日本記于時延喜此時まては間弾人在
し然中古以来樂曲斷絶之 此器于今相殘當家者也 又曰虎通

曰琴者禁也 禁止於邪氣以正人心やきこゆことわりハ源氏にもこそや
これはなにといひしも此詞をも物の音もしくのりし風さ海すり
ともまた傍都琴をあそびたまひけるなかをとおそろしき
山のるをもれいろくしきけんと 瓠巴皷琴 鳥舞而鳴魚躍
而遊 唉 列子 琴曰師曠晋之樂官也上於琴能易寒暑 呂
風爲晋平公鼓之感玄鶴六下舞
せいぬハつし我物なやあらん
後撰 こぬといひしまかすふつるをとことぬハつきとのにしなかす
いのちをましとく
命にたくへかすふそのあしくあるにかハ人をまちらふしとせし

ひとりうすよ　一源
まし岸よ　代と成なり
西行も子もとなき也凡山桜もろ花のうつりこめくらしかと申く
さしなり非難
秋の夜乃うせとうし　ひめ申しとあり
（なをき）秋まうこうおもふくれこつけ桜秋の夜のうせのとし詠めるさに（元良）
こうすやとしつらん作へ哀さ夜すともさうきうき寺風
此日ととりまてめとあそり　やとつむとハ女く舟と風
すり艶哥をとゐくあし也あ風之堀河院艶合すしあり
（又実を宸資母）智すし大納言紀のうれしとせつよ舟く江申

年海其しいまくらいぬかもりと也末の思ふ心ちあそり又茲云はさハ
矣なり顔師古曰未央猶半又王逸楚辞注曰夫昏ころこゑそうハ
未至半年齢也百とせの半の義又女十あ海其の秋へ一説云
さうこハ此や中はなり中比やさうこゑまて此ちうき風なる女とへし
さうれ此あらや万葉云（是とけ此と）　あうこれ彼へすしれさうりこゝ女のはうの　是も
けこやめとあやしハへ説あやめ同事也云々今案こきかりうへしめ
おし経くゝなり
秘して此迄てとに　きうつこ女此御縁也
自さうかと　平生　据の岸
あり文へ　うらこへなり

古きハまことにむつかしく作者もさたかならさるを

此歌を父母の歌といふまことにもてはやすにハあらされと此歌ハあらハし

古今此序より難波津浅香山の歌とて手習人のはしめにもしけり

しかるに此二首の歌の中に一字つゝいふ此歌

とたゝのはかなき事をいふ事をもてなすさへ此うちにあらハれたり

とさかりしとも云ふなり

少納言ハめてたき人なりし　あるへし

またすくれたるを　能書行成卿と云ひしハかの人なるへし

まことにあさきことをさる事とも人ありて

おもしろからん人ありてつれ〳〵にかきつけし

詞書云　安積　ウネメニツ　采女

采女ハかつらきの王のみちのくにへつかハされける時

あさか山かけさへ見ゆるやとて一字つゝ書つゝけけれは

国のつかさのおろそかなりけれはとて王のけしきあしかりけれは采女

西国法師云々あつさ弓はる

あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさき心をわかおもハなくに

あさか山かけさへ見ゆる山の井の浅き心をとよみて

こゝろをさとして王の心をやはらけたり

かくして酒をすゝめたる故に山の井の水

王仁ハ応神の時の人上古ハ王仁をも作者にせり

続日本紀曰藤浜足等言己丈春日作法性之素之民男
巫人女巫人雖冒王姓以世言之不姓正庶
いかて夢とらりさむいとらうすくて　夢許為る
ゆめの心をしてゆめとらりとそ伝へしかれまてし
きし波のこゝろゆめ人山りゆめ人へたとへしてゆめとらすゝ
奥人らあつくはかり夢らりうけて夢の山乃む奇かみ事故し
未勘古らゝ今案只晴らす夢をせく夜のとゆりてある人ゝ字
や　密通繼母夏　則天皇后者初太宗皇帝之妾之後為
高宗皇帝后　光仁天皇后井上内親王通桓武納見国史
ゆるし夢のゆめ　こゝし行

あふことをいまはかきりと夢のうちにいつはりとも夢をよみつゝあふこ
源氏の君をむかしのことしのふ夢をつくり給ひあしたのこと
とりしとこひせ給へはかくひすくおもひしもかなしきものゝとあはせなり
ときひのかは光源氏天子の釈とすり給つゝ地人の中にたりひぬ
ありしかは左遷れすゝ　毛詩曰下莞上簟乃安斯寝乃興乃
古我夢吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆維男
子之祥維虺維蛇女子之祥　斯干篇　又曰占夢設老訊之占夢文選曰拝
巫成作占夢号乃貞吉之元府
さの夢あふまて人にかたらすし　水原抄曰善悪夢不可
語人といふ本文あり　其心やらし今案只是穏密之心や不

及第文治法矣

あやしき僧なり

伊勢
おくいみハ家まつハりまつ流れにしるあやしにまゐるきよハ世も

つんられぬなしかと

世のうきめみてぬらふ人いれんにハあまし人こそおこしなれまさる

まあ風かかなれまうひ　斂色（ヲサヤカ）拾仙居　正昔（ヘメヤカ）同　成てしこく

水原核に末代ハまやしく大和物語をけくみへしたまハれてまし

まくとあるへくしきうり手稿花巻にきぬあやしきか上老人

のさうへことのれさるひと名ハまやるはまもさつまあり

ねしあり

あしまにおつむ和りうしぬ　えおゝぬたくなく妃たすつむハ

泥や

おすへ人おやし

えむすし入れあしらむ松さりりおかく同しへ松くこひんとおもひし

ちくり　に
おしへこそおすし　松秋こそこえり　おすへ人おや　をつくすりまえ

てらつくて樣しかとえん業の孫よおもひおはゆへのうへくさ

は奇は葉れ名れえ婚しは葉れ名子先生色くにへおうおう

色とを今集のうり見や根よかひけるくハ茂臺女流御抄り

しのや古今うり　むつきれひとりし　此よむさしゆく

妻そつんかりし蔵しそ　えぬとを奇の世之都ハちすし体とえて

かく女主殿とゝいひ或は露をけるなとの枕かうとゝもあ
るを権の巻ともしらてさかいえと業の仲人まよすくさを捌し
給ひめまゐとありつる文一行しゆゑの縁と
六條内大臣有房も業ハ色の家頃や　位の相ねなとも業ハ鹿金
の様しいふ物語中書の叢人なりつゝゆゑとあけ名人さて足を
あまりの人むつかす縁り
なけれはなれとたし　すとさうれの詞やむかしもあなり
あしつらのにうつよみ縁めハかすつしとを
あしらへうゝよ哉よ其縁白浪の志しみ美をこうろりふとハ
なりしは思ひさうらん

人志まし次第ハいつ常にも年をへてなるにてこそもあ人坂の関
伴弥に人まハなるつゝ応さんとてゝ奥入よこ出しかるこゝとあり
理ア縁
いもうと　章　伊勢物語
ともかきにいとおかしふし　男女ともよ所の君に男にとし
うつきの縁
うつくしきにれなろうつきもおさむ常よおかしかりしと
偏愛（リツクシ）　漢語抄　愛い色　拾仙鈔　鶏皮をうつくしむとそ
いとうかしこ　妹と門　催馬楽奥にアリ　猿丸太夫集云おもひきや
女の家のまへを見に縁ととく菓をひきひていまとうち縁

いもうと門ゆきけるくにあまもりにうれひあるあり日まてみ
ゆらしまりこそのまめそのもうへは菓のこさしにさりりしませし
女のとしにまいり茶はよかしとあきらか茶れて
姫の衣の菓乃尸さしの侘しこゝはおくましあつぬ物すてありけり
いふかしにつきさそ伝うる秋の衣の草のこゝろしにさりうへやとて
あつきをすくさて日ゆらしよは旧をてうつましといふ斎を
旧たちうりは旧をてうつましさむとて山を出て中とうし居り
あまたさまなり　此俗常漢斉　あつきは和歌の題をよみしとし
又東洞とく秘曲あのるり常漢斉の此俗の秘事口首の其一
なり東洞おくむきうさてはき斉とうるふを今世知人稀やうく

あらしるまて　云て　日本の
それまでしてはとりまでしてはなり
人ぬいしけるしと日ころさけし　提
きむころへあり　うまへのありしよ
おしのつるきや　敵の字をおもししてあり家のまゝ
朋らの夫とおもし此九ありあり文書のおしうりをいてり
又大尽すくぬ人々とも　某敵く云ふみおもしと云之、らか此物の
まと大路のおしうりあり文は物の和とあるおしともいてり
女は人ゆつかる物をさと今らおしへゆきて行
陽體對陰自在陰柔順從陽　端嚴如天后大慈柔輭従

色しくおもてあかくして紅にひ色はこき事なるへきなりとも
紅て
鈍色 花上 祖母の服をきるなり 一紅に紅はひ（非）いろともいふ 下火
色紅なり祖母の服の中なるとも見くわしく紅なる事
なる是は紅をこきせぬ凶なり今葉於鈍色之紅葉散るとも紅
祖母服三ヶ月とみえたり手紙是上以後は結構にあれは
例もしかれはしらる事へなるとをこそ紅てとあるへし自
此のよ紅かはしまなることも事かは法定なり色のこと〻なり但
今れ祖母の服さ由りて深からへきしあしは或又色をかへ
いかなる事ともおもひしいてなる是はその花の紅

四位五位こきこきませに
みわたせは柳桜をこきませて都そ春の錦なりける
延喜廿年京極斎合の
みえ宮うたあはせの京は桜花をてらてこそことこきませにして
ちらこきませは色よしや数多てちらこそなとはいへとちらこなとして
みえ知とてさ音通なりけり
むらしねとこえてしかこのまめ
ちかなしともむらしねとみえしかこたまはむらしやさてそれはけ
まきるんを読（歌）なりと ひんなりとは便なきことなるそれのみ
よはあしきなりけり

若菜
巻名
並　末摘花

あかしき色とハ紅の事なり此すへつむ花を神に奉らん
ありしとをうとあるさりし折からの此巻ハ若紫の巻の様也
並なり例のかの巻にもつれうかなと此書にハ上を二隠居へ
ひとへらましとを云かり以前の事と云なり
あるすなり
ころ十五女の父と云ひさき右ハ立奴へし人に九か月奴世にし十有へと
もらむとをりし此吾部大輔　正家宗倫　ころの此知信云
あくまでの流かれとこ二人ハまらんとぞり一人を大蔵卿子王孫と
云やとの字をかく色し経ずと世雄宗倫ゆ智宗倫なと

いふとし弘安の源氏講釈の比とくしての義を說成
こなり定らると說一說我宗倫ナ云　和漢通才学通和漢とこく
かいひろめ人とくとて守り行へし　僭(セム)やい前巻のひいでも
まハかり人しをまハ眉とひらひいろと　潛龍と云を潭底
に潜伏しと云ふ事なり周易云潛龍(セムリウ)勿用何謂也子曰龍徳(アツテ)而
隠者(カクレタルナリ)やとして
三つの友ありく今ひとくさあかたくあらん
白氏文集 北窓三友
今日北窓下　自問何所為(スル)　欣然得三友
三友者為誰　琴罷(ヤメテ)輒挙酒　〻罷輒吟詩
三友遞(タガヒニ)相引　循環(シユンクワンシテ)無已時　一彈愜(カナヘリ)中心

一詠暢ニ四支一ヲ於恐中有間　以ニ酔詠一継レ之
いまひとくさハ女房かたハ記乃本ん作り人ゝハ酒といへり
その比あそはしし人ハてそあそはし
云傳又
その意を問し人ハ此おのつからに本そゆらもてしもと　もとより
おこまつすり有り　下にまつすり
こぬ人をまちて行つ久る比月をあはれといはぬ夜そなき　貫之
よひよひにおほつかなる山を出しかと　太田山太田比らの宜真平清皇
大月よ以て花比ゆハ仙洞をと梅すら乳
いさかゆくまつ　諌
おりしこれしる　都やひハつむはすら人ハ比いさむへき之春はやし

同名
ふゆさましきり　いそくしれさといふ之切よおりし本　倍也
比らの花る梅よ初かおるゝし香り詩よ歯処る鶯蕪半と化
出つるも比の花や鶯飛を歯処ふくうけも聞家にんを薫せる
夜く梅よ初かゆる之薫をあふはらふもいる家とも譲や
おりしさかされ比かるさ中とりとハ　伊毛可ゝ度世奈す久度由
支須支可祢天や和可由一の波比知可花乃比知ゝの花乃安免
毛ゝ良奈世しても愛を花あけかうとりす花底とゝて
木の良世して女をき　催る木妹之門
ようやらりまつひ行　為家巻妬同岐や挟垂比よつんて

こり
かやうしことをもなくいへる也　そらうゆきさらば人なり
八月廿日よりいすゞにて夜ふかく月の人もとをするに
宿
志そろのとき今宵八月十五夜山風なる空に月のあかき宵ハいと
夜ハやむとき　夜中すさとる詞よ文字をもまたくいへるなり　説 定家に
あしまるる山のさとれさびしさハさらく夜半ぞくとあれかなと
山おひ　鋭(ケイ)　日本紀　形勢　新撰字紀
いはひぬれんまく　いかをいはぬ人兄
そしぬれて　ほのくしさおもなり
さまふるなり　さま露也

よしと　由ある迄をことハ讀ける詞やんはつねまぞとなるを見なす
同事や
えひのかいとなりしく　衣被香　又宦(エ)衣 被香 宦衣(エロモニホム)
東宮切歎　日本紀曰嚔(ムセビ)唱進(シ)退(イテ)血(イサツ)立(イキ)懐(テ)悒(ミ)無(ウスコシ)所(キ)訴(コト)言(ナキ)
當仕天皇矣〻　又曰悽遑(シマイテ)不知　〻ニ示　此事秘説アリ
夜うたゝさこ落しとの行　襷(タスキ)　あるよこうとくやらん之
左今ありしとゆかり
おしらめへハゆかりとこしやハいひをそねるる世中此夜なてするる
夜極め行へ落と　油断をさせたるんや
極りもまとう　綬(ユル)之
比の極こそいひめしそ　粥　粥斎之〻又　麻本之　周書曰黄帝始

元る火穀為粥東坡詩註曰粥則宮中道士〻食粥於早
晨也
ひさしく吹出しとほつまたくまつ季て
源氏中将与外中将を借り孫ありつる同車せてまいりけるに
むらさきぬるの年一面吹出ハをひとつ吹出しつるめでたるをいとく
まとらは
色かひとつ吹出しつるや先仕ハイ同事也
中さくれたらめく　中尖　さるさをきよるのひめきまし
大ひちまささくちられめく　大篥　ナカムサハナノコエヲ詠尺八　極仙嵐
長一尺八寸　舌四寸八分　律呂圖云大篳篥こく

又玄尺八為短笛　玄宗皇帝前罷洪也好吹尺八被損云〻
云〻　高僧傳上
志く　試樂
くさいてけは　腐ツメス
わるいひとく塵るれをろこしれ物すまふと　ゆ螯　秘色　秘
色事今秘色磁器世言錢氏有國越州燒進不得臣下
鹿用〻故云秘色皆見陸龜蒙集越器云〻九秋風露
越窰開奪得千峯翠色來好向中霄盛沆瀣共秘中
散鬭遺杯乃知唐已有秘色非錢氏為始類説　今案秘色
ハ磁器也越州よりわたくまゐるものかうちも色翠于志にして

猶ます〳〵まさり仍是を秘蔵して尋常に言しや故
号秘色云々
なかれくさをひとすくわはまけるなまりて多
毛詩曰 退食(マカルヿ)ハ自(ヨリス)公 箋曰退食ト謂(イフ)減(ヲトス)貪や 脂をへん
となるなといふなり
さるうにろしをしあまてくらしける 傀儡脂女房摺と
らさす筆なぬこまでを毎をかるめしくおりしき物や
あいあうえし 内蔵坊 立太宰
いのちなけれハかなかなも世をもあふとのすりきり 荘子曰壽(イノチナカキモノハ)
則多辱

こひあらぬへくならふとあり
(万葉)世中をうしとやさしとおもへともとひあらなつるおしおふ〇ハ
此哥ハ貧窮問答の長哥の反哥や也と寄あはなき
ひなひさは 夷(ヒナ)(イナカヒ名之) 万葉よハひなの国ともよめり又
夷中夷放国をゐなかと日本紀ニハ夷曲と書てひなふりとよめり
いさとさんちする 聡(サトシ)
やりそて捨んとをさんかりして 衡黒 御沙抄
まこなのうらをまし と
ふけんのうちれのりとのとこう
普賢菩薩乗大白象身如紅蓮華色 観普賢経

色ハ青きかりしくさとさまくし給へ　歩青（サラキ）
或ハめくく白ハすこしあをくきゆる也或ハ名をさましとあり
両かはよまへり　瞳いりとハ顔いろきゆへ也或説瞳云々
さるかいく　髐　荘子
かゝ乃かりをしもかくし黄よ　かゝ場之さりえ同事也
搔きし色のこゝかうなとしるしける一かゝる也
ありかるさうらさかるゝく　雑色事延喜式云紅桜色也
紅葉石以爲蘐服と論語にいへり紺者此二色を雑色と云歟
但今此搔るし色ハ紅此すき袖之うらさハ御や補男女と
ともに着くし或説云女房ハ貴人着する事也云々

あるゝ此かゝとさぬ　貂裘　貂（フルキ）てんと云獣也如（和名）
鼡といへり
杜詩云李子黒貂裘注曰蘇秦未用黒貂裘弊又出
放敖歳大困而歸兄弟嫂妹妻皆切笑之又曰莬鷹凝鶴
髮蟠亦貂裘斟酌嫦娥寡天寒桑九秋月詩貧家服
よろへつも
西宮記曰臨時祭之舞人歸路着黒貂皮衣之　拾遺曰中文
安子　あるゝ此かゝとさぬを着る人かな入道横川よきて侍る
よつりしも彼衣なまこと山たさむしといあるまじハ此かハさぬ
を風をふせむ

こゑいれ桜へはさこ　古代　由付
来しさらんれ神らいくさる　儀式官
よろめりしてそ忘るゝさころも　よろめりも忘るゝさとの
みそわり面は　上句未勘
松の宮れこあくしそゆく　勁松彰歳寒ことそり君宮に
色潤まさるハ松性のあゆてかゝする故欲又眼前まもてと来より
ハ松よりひらたる宮ハあゝて加をにこ粧りすり
名母面つ未れとつん経は
秋神ハ名ゆよゝる未れ松山ら完より波れこてぬまりなさ
あしゑ面は　あかさき　まちの塚ゑや又云あしゑ安の乃るゝ

あとしすめりしあさね神るか
古今
妹の哉てしさしかしあさね神よりともあハてうし秋り
まらさこよのハかゆらかくさんと　夜深煙火尽　霰雪白
紛々幼者形不蔽　老者體無温　悲喘与寒氣　併入
鼻中辛　白氏文集
んられ国うこのあつてしあはてし　檀紙や陸奥より檀紙を
すこ神けはや古席よつんられふ有の海桜こ れらとそり
檀そまあこや
てこに出るもそこ乃あり加らりこてこいるはうらそとさくそし
いそより　裏綾　衣箱　蒔絵　已上見延喜式古代沼繪平具

袖まきこやさむへをなきこ才に
あハ岩戸もふハすふりそ白妙の袖まきこやさむ人もあらなくよ
令ぬありてあらそ　忙𢭏（カホアヤム）　渓浩
いゆ屋りもの思ひ桜路ましく　イなさ庵しさとあり文字なる
桃色今桃の花紅色や　見延喜式　志のま八ゆかし色同物
紅よすへて八ゆかし色といひ紅よ訓する時八なれ色といふ
世え桜路ましく八桜るしいろよくへてうし茜色
るそしれかうへひとしらこ露やなり　表裏同色の濃や
是も旧縁に
あ川りし我いろとハすりにあさかこれすへつむなかを袖よかまたせん

よくにのこんつやこひん紅のすへはむ花の色ハあさくとも　丸
古　人寿まにありへいと淘し紅のすへはむ花のいろりいくなん
紅花ハすへようさけハ色多く末よりつむなり
いろこき花とみえしかども
古　紅（まそめしらもそのまま紅トアリ）をいろこき花とみえしかども人をあくにハうつろひてふなり
ありくれつ月（日親読解）かきをねしとも　たりくれつ月花うけハつきころ絕
おもうけすといふ同根也を以君詞よつ月あへしとあ路也此神之
紅こましらてれ名をしあらくまハ　太（ヒタスラ）説　延　白氏文集　延如
永　日本紀
拾撰
紅こまるにうち散りハなすくにその色まへよりくものこなくなるか

む梅の華はいろ乃ことなるきは山のをとめをみてよしとうたひ
すゝきて　求子は哥や　表白 社ならくハうたふきは山とうたふ條
社まてハ各ろは所をうたふなりといふ
あるはやさむきあさ露よかゝ袖つこはめ隠なるはいろあいやく
つくしらん
足もさきは哥はんの所勘かい袖をあさらんを云ふ摺練
表面あらくさをかりかく中主なく紅の色なり次々ハ面表紅
は哥物中まるや
左近乃命ぬひこれつゝてハ尾もし殊ひつらん
履中天皇之代倭直吾子籠土貢采女蓋始于此　肥後の采

女とす讃ん　たゝかとをは采めとあり
ゆうひきく具
色ひそめ　衣服令義解曰蒲陶染（エビゾメ）　蒲陶者紫色之最浅也
おとこへぬうか　天武天皇三年正月朔朝大極殿詔男女無別
闇夜蹈哥男蹈哥
聖武天皇天平元年正月十四日
始有男蹈哥女蹈哥　天平十四年正月十六日天皇御大安
殿宴群臣酒酣美人五節了更令少年童女蹈
哥日てゝ塩鰯や
七日はきら忽をそく　天武天皇十年正月七日御向小殿宴

女をやさ行つるけしき　婉娜　松似屋　云初寐
ひのおし　日脚
こゝろし女いかにもしあれそこ
鏡寵　唐連　揆上盃　揆鬟賓の名足入つる也けり
かれおりしはこれよりともさるゆへなれきりさしも
おりしよしれぬりしきこともなきとれをくりまいかり
しらハさもくりけおもしと八おりし有様
こゝなハりよ源氏ぬきてりましく様さぬもさるうちえし
女様之をきましくしも源氏のおりひときゝ行ハぬよきぬのとん
乃女つりしきられをきましとおりひともましく様なり衆衣を八家

よま荒すりや　何うハさこと云
随ふりしとのハさしとうまでく
わハ女男ぬとしいあらぬ随わしきうりまゝ随くとの八営ぬ意
さ人様善はと
とふわとうちゑつる毒ハ鵜とにわうたまでとも被ゝ帰
夢かとうおわ極様と
奥入
夢とする思へらましおわつる袖ぬよつんしかれらさそかひつる
新撰　宛特夢と不夢　併行尺　今案　忌くハ夢りしそおよ
おりひきや　宿ゆそまけく是をみんとハこれ奇れ詞四之
妻賢尺おれ遠也哉

むかしさくらかさねあそびけり　桜かさね八重ハしろく裏ハこき
蘋蒭や　みるかみかハ細かれ少女の思ひはじめん
ほそくれなゐのうすようらちれくにかきをぬらしてのこひ行ハ思ひ
ちる命よいろとりそへ行也　宇治大納言物語云平仲文
ハ女のもとに持そえて行まりをとして硯の水入を常にて
まゐらてめをうるほしけるを女ものくろきをすりて入ける
けるをしらずしてぬらしたりければ女のかほを見せてよみ
まことにはいつはりなきは君かうへすみとともに見ゆるかほかなけしよき
大和物語ふとけ事あり
あらしんハあへなん　あらなんといふ心也

いとおかしきいとせとかんくさり　いりせハいかにとあやしとを云
伊勢物語 伊勢物語冊の名見たるをしめくまぬとかう行しによりて
まぬをいりせといふ心
むめハもしさかりかしくなくてまいり
ふかきをとりて思ひ梅乃花をとりかへもあかしとおもふむまと

河海抄巻第七

正六位上物語博士源惟良撰

第七　紅葉賀

朱雀院行幸ハ紅葉の賀也 此ハ宇多院ニ見 巻中花宴

巻にもとよりこちの賀といへり 此説用ず 秘説あり

朱雀院の行幸ハ神無月十日あまりなり

延喜十六年三月七日辛酉 行幸朱雀院法皇五十の賀也

年八月廿八日行幸同院 詩題高風送秋韻

康保二年十月廿三日行幸同院 題菊花芸丹霞 朱雀院ハ三條

朱雀之是後院也 古今集ニ朱雀院とあるハ宇多院の事也

脱屣の後此院ニ御座也

さくの賀試楽し
源氏の中将せいかいはをまひ給ふ所なり
青宮譜云此曲兼和の眠大納言良峯安世奉勅命
作此舞時依勅盤渉調但詠小野篁朝臣作詠曰
桂殿迎初歳 桐楼媚早年 剪花梅樹下 蝶鶯畫
梁遅 舞装束青海波 青色袍表袴文小葵 蒲萄下襲
面大海浦 表蒲萄 大海浦半臂 舞手の一手横亭波川波形や
見えやかに節のあらまして見えぬの文字なんと
皇主大中天 伽陵頻伽声 法華経 伽陵頻伽之卯声
勝象多く 或迦楼賓 或曰伽陵頻者梵語也唐云敷多

此鳥鳴時ハ音中得若空ニ我常楽我浄云也
神まゝの言まゆく所へ之 大鏡云いとしく給しこと八
歴くく同君安云の大舟乃納言に昌お給の家良所の所暖の
親王雅明の七あまり舞まで所つれしとなり此事とを給
しる万人見る人ハ御子の黄はかならぬ目なる
せにてかしくにこそ世所しかて山非めてしとも多く
まの妻にき
おもにゆつとそなり 孫也
此の子 良家子也 天慶参年十月上朱雀院の御子

おほくしとく舞人なり　凡しろき家のこととも　を宣

花物語第七　下三條院（りのまひ）　舞人家のこのみえしにからことなり

色々ころもはきよけれ房にまいりたる二所八ちかうまいりてまひ

行高松（与明天女）との　いへにまれいて居納利（北手）まひ行殿（修子）れたへれはそう

のねつきけるし（北面云）　淺王まひ行ふ（紀之道ハ二家のおとゝそ）　左に有らしき心れ

まへしつかまへいしはすらせ

或ハ巨く　玉篇云　巨大也　あまた八大人ハ物九ときめてすらるれ

かく人ハ純きはをへしとけしとてあら舟よ　てもくおほきし

とハ人き

或云う人乃純なることはをされと彼のあら　以す　おほさしと

といふき　翁の姿を清くとしたる半白縮や　翫ら沈

すこしとれたる人のしわれる

おかるこよハとあらせ　詞に　おかし翁のさしんれるかる　七八十まし

てめくくハまとおりしもの　ありき達も　太ゑにハあらさとるとき

とふくてらし

人乃久しくまく物別　色達は洗衣一とそ蓋れ

（宗肖物）一説云　藤原女御之后八次年二月也　后詞乃上ぶ希

則天皇后者荊太宗皇帝之妾　後高宗皇帝之妃

為后　又号武后　於感業寺為尼　好還俗為皇后之

通命紀　女后立也　以年とむかひて　尾大宝女御たる人の紀す

内閣文庫

ちえを菊まじりと云詞や是をまかこし我皇后の事を
の給へ家と思ひよりて此后詞とハいはず心さましく楽
しけ給ふ事ぞ凡たとひ何女子過る是朝の例なりとも度
々是北女御いかにかくやうなめりとわざと自様しけれへまする
和曲唐物の給ふまじとて承る人乃施宮とハ是等の此后詞
とハいはじと云后ゑまじとも后乎すくおりしませえ后詞
とゑ我後今子細是詞童詞看詞皆　同書に
まかこし心ともいへし何所ましともこそおかれり

唐楽　高麗楽　天平十一年冬十月皇后宮之維摩講
終日供養大唐高麗等種々音楽尓乃唱此歌詞 万葉集ニ入

いうそくれいきりとその人を也給へり　右族や華族家と云

有職

さいしやうふえ　文武天皇五年今年十月一日 為大宝元年 八月九日
治部省雅楽寮始置ゑ　雅楽一従五位　同二年正月十七日以従五位
下部々大伴安麻呂　正四位下粟田真人　従四位下小野毛野
紀朝臣此後有紀人於大同元年六月廿日設雅楽寮使歌
内七道各一人判官主典一人弘仁以為雅楽天平四年為八
座や　番楽所事　延長十六年承平了法皇於
十禁楽所定保忠卿于時番楽右大弁
四十比加いしろ　長秋卿笛譜云四十人之内右府二人破二人

恒代廿六人ミし　　揚氏漢語抄云鈿花　加佐之

かさしれおりこちいつうちてあく

又挿頭花

かまくらの菊をおりくる名大将さし之後　　菊挿頭花　後撰云

女八れ兄とえ名れ此よの女より　四十賀し侍ときの菊の花

をかさして　参議藤原伊衡朝臣

よろつよれ霜にもかれぬ白菊をうしろやすくもかさしつるかな

栄花物語云治安三年十月十三日殿のうへれ此御賀や　左長臣源倫子雅信公女　中央界し

かさしれ花とさしこりしわれ菊れ花をへりてこれ

ふん毎ちかさし中あう

延喜十八年十月九日御記曰女房侍前菊花盛開以夕欠衣

令姪花人ホ相集頌設小宴日大宰帥親王令侍臣男

女房各各菊花和歌以女装束賜親王以下六位以上

有差除以上来而給折菊花等称歌

ちう毎さりりわうし　　兼亮

侍りすわかれりて　季有数後年数を入侍

家吉殿の此ちを此乃江子せ一ちと八月　秋風楽舞給と

ゆらん　秋風楽　　盤渉調

正下のちよし行　　文武天皇大宝元年三月廿一日以中納言真

雅楽頭兼部補ア守九男

一石上麿始叙正三位

あかいよのみハさえのきたまふとくさくさも也
まんところ事いし　政所　家司
いとハぬしくてかうし行ハて　官
おさるやかうりてとく御行かうと　漆 下野
ことうしとと行かぬかとハ　要務なし
すりしくいく行　使やすてるかしまし
御代さくかゝこハ三月ちハとてはこりにゆかせ行
除服
物忌令日能父方者晦卅日如月母方者晦廿日服三月
まこおやとおくておひいて行しかハまさゆきなまかあるて
装束いまと文箒ゐまでてさまハまさかやまつくてと

いかすり行きまさゆきとのまて斟酌れまします
くまへりていり行　胡籙　御寛之自弘仁天皇始之小胡籙幷延喜式文年三停止之同九年又行之依
詳注下
とくさ弁行て　やくと記こくとかり
かやら物とく　追儺　十二月晦日　金谷園記曰為陰氣欲絶陽
氣始来陰陽相激化為疾癘之鬼為人家作病黄帝使方相
氏黄金四目身著朱衣手把楯口作儺之之聲以駈疫
癘之鬼至今歳除夜為之月令曰季冬命有大儺旁磔注曰
此月有癘鬼将随強陰出害人故旁磔於四方之門降用
制曰季冬晦選楽人二百四十人為儺者幘絳衣赤布袴以逐

悪鬼于禁中其由成夜三唱儺集水上剣皇帝御殿儺入
春秋冬儺（左伝）

南部新書曰除夜儺入殿前爇燭熒煌如書唐志曰太卜李
冬師侲子堂贈大儺天子六隊太子二隊方相氏右執盾導之唱
十二神名以逐悪鬼鼓署令師鼓角以助侲子之唱　論語曰郷人
儺朝服而立阼階ニ孔安国云儺駆ニ逐疫鬼ヲ也恐驚ニ先祖ヲ故
朝服〆立阼廟之阼階也
文選曰卒歳大儺駆除群厲方相秉鉞巫覡操茢侲子万童
丹首玄製桃弧棘矢所發無臬飛礫雨散剛癉必斃
王建宮詞金吾除夜進儺名画襠朱衣四隊行院々焼如白日

沈香火底坐吹笙

文武天皇慶雲元年甲辰十二月此年天
下諸国疫疾百姓多死始作土牛始追儺
御記曰延喜八年
十二月廿九日仰大臣云年晦夜処々或不追儺人々云今年愁
喙此依不儺疫鬼云宜仰所司勅令儺
除夜々儺ラ追変也鬼ヤライト云追の字と
思ふと読之文儺の一字をも鬼やらひと読之始禁中
之諸家行之

さむさし小きもわかさ所もわかさ竹八七内春之文
一院すくハ度つかの三條北文まうかいり竹
条左　為実之内　相蚕門　表家　朱雀院　一院　相応寺ノ　号記

うきゝしきりの詩　呪咀うらみに

こゝろをはいふきさ　せん後に　心二九ヒキヒ三ヨヒ同郷斎や

又あらひあきことら八幡小わかし所へ尋ゆり

源氏若宮若君　冷泉院　容貌無双於人上かくし所つくとし

花ありさかへんと所へもとへひあきせ世に作帯とは

試宿りをさしてしいはしらと花はさかえんあくてさかん

ちりえられこれ花ひらま　ちりそらりハかしきことゝてろく

しこれ奇なまハちりまこにまへしよりかりの奇なりて云

なり

いかめ儀のと口まさひく

随まて八入神ノ儀の東方にやらんくるくとつくれるなき

見はめ小わくハ

伊勢の海の清き渚にかつてまふへるもま人とゐくまける

しかれとも中に九かりそれ之かうこさすり所をもれとも

ひかてらにをしくうして志へ所　平調ハ箏柱とさかへく

たつはなり

机し所に　由

かしろくさりといふ也　長保楽 大食調　破 保曽呂倶世利急

加久利夜須

そうしあるかれ　拍子

いとおしく
きこえし御事なく　鷲談　りょ紀　さきは夫此字や央とは久しきことは之右
年比まとゐし千余年立る
ゆかしき此人めして　中院の御誓と御命のおやさし
山楝御の人ハよくハたび此文此ちらと行とくはする似れ
うちきれ人と云や一説に山紫紫をは比よ似人なりとし
かくおりれえあしぬを　蝙蝠とて扇と作始ものを以て扇れ
名なし
まりにいつく家にありうて
師説云眠一カ人　或一カうう
文選云　高眠（タカマクラ）一説　眼皮（ニカハ）や　枕仙窟云　眼皮（ミミメカニアン）瞬今案眼皮も

喜謂ある人老者なりといふまでの旅今日ハなきてん目の波
ハ年をまちハ名もなくおらいりなう
いえしうてまちたりけり　扇ましく御らまちの髪に节にほ
そりれてい文字御のまちにてなり
おかあるきの森のそうこ菜庵のまちハ詠とまこめる名今すり
老いりろう　菱のとらん
湯もなく歳のよきの大あるき此杖で宮の名ハあきれ
橋よりしらとうりきて
津の国の名の此橋のなし杖　老人　常りにあるま行能しくり歌まち
そが両えはなまちとかくりける人杖へなるまちハ名を見ゆり

ふくらぬ人の我世なぬ程こそと思ひし人も今はこころん
蟲まんゆしとは蟲うるやくなしいふる乳
兄弟く別し我は秋うちゆわくとも
假令ゑりてよもしてはこなたの物核人よ兄弟く隔あたいさかひ里まて
交しさぬなきうあふ世あるせはつゝぬさと忘みて有けるかし
うむめいてん　温明夜
うりつくりになりしやなみ雨しくと
山しろむ西のもとまれうりつくりなからいしやさいくなも
以下よせんて彼乳いりまさんすやし分雨さう無まく住さ良以
しらやうしありまくに　催馬楽呂山城三段

かもとあうまおう着ん着れ人もくやおうし切りきんと来と也りまく
去さ行
け尹定家にあまはくしことわり歎行なよは文君と以ひ
けん着れ人とてわり西流佑と純白やう泣ひ

鄂州夜　白氏文集廿十

夜聞歌者　宿鄂州

夜泊鸚鵡洲　江秋月澄徹　鄰舡着歌者
發調堪愁絕　歌罷繼以泣　泣聲通後明
尋聲見其人　有婦顏如雪　獨倚帆檣立
娉婷十七八　夜淚似真珠　双々墮明月
借問誰家婦　謌泣何悽切　一問一霑巾

低眉竟不説

文君事　史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相如繆

与令相重而以琴心挑之相如時如臨卭従車騎羅容閒甚都

琴文君竊従戸窺之心悦恐不得當也既罷相如乃使人重

賜文君侍者通殷勤文君夜亡奔相如

楽し　鄙劣作叶物俗意狭原内侍參ハいとゝらしくて山路寺

とうひ女房と鄙劣なく紫天乃寺を因しまおもひよう

一　かえ事

君かつてやさしのひ屈の姿ら女ひて女ちよりけ一回よ

さしひらいそ我洒せとうちと人あり　あつてや乃みぞれ

あまりにあはれさもことさらぬ道ぬるに戸ひらく声もかれはてし

とあるハことにそことまさしめやしひらいて我も女我や人ぞ戸

催馬楽　呂律ニ阮

女松めここ松　以中ねころけるも行女れなく源氏乃紅いろ法

と狗きなかり

さりたりと比理事　大丈ハ比織のなし之

そのかなれひ兎葛くつんとゆめを

和通非

家せこか久至しひやりてかりに我を北かりまひるつく寺まと

よしもこれよひき秋を　おまひハおもむしの同事も

どこえりすりぬ　嗚呼

うつし人をよみける也ふかしや　現人

五十 よそにしておのうへしるとも我ハなにしか外れいふらん恋しきまゝに

あらぬやし心こゝにかゝりしおひさ○ハ人もとをも道をもすてゝ恋しさ

うつし人かしこハまことのとなりとそいへり

うへよりも歌ハ古今とをらんと也

此のうへめれ哥そへたり　まことの一体をも歌よみたらん人かと

かくむかしのことの古今く友則こし歌を詠きつとも云

此中ね歌を此人とハかくれたるうつし歌をよみておとすをあさ

まことにかくなりとよめり

ちこともあしハよきあれ

かへて此後をも知る其後河をこそとわたらはまかりぬとおもひて

ありあれさ由やところ行　兼西 伊勢物語抄をとていはるへし

あつしえかしやかふとわやうさまし

是ハ誰なりかこゝわたりやせんと云ひける事歌よみてありしゆへ

中とかくこゝゆんとわたり

ここは山かけなとかゝりしにてかへこめ行て

いつまれてここは山かけ名をつけ川いさとひしよろしき名をとせし

あとまさり出て行一所を　所をもとめける

此ときし十月より歳ときに行けし

左傳曰帝嫡妃曰皇后　後漢書曰以備内職為后正位宮闈

同躰天皇　周礼曰王者ハ后　又云以陰礼教六宮　鄭玄
曰陰礼婦人之礼也六宮後五前一又云六宮謂后也婦人称
寝曰宮之隠蔽サ之宮也后象王立六宮而居之亦正寝一燕
寝五同註礼記曰后之言後言在夫之後也以女謂後達 皇后既居後宮也
神武天皇辛酉尊正為皇后踏韛五十鈴姫是也今日中宮
職 謂皇后宮其太皇太后亦曰中宮也今称皇后者為中宮也
源氏の君宰相なり給　称徳天皇天平神護二年正月
八日中納言兼麿男石上宅嗣任参議 元中衛将軍中将如元
此君ハこんなる御子ともちゆへ源氏乃みかどの子にてなり給へき
ちかなりしをハ藤家　冷泉院乃御弟　親王達なく人臣なく

此君ハ先例なりしとぞなり　源氏稚致右大臣　能有例歟
ゆゑしつゞしらをとおりハ中に遣くいふしどもひなきゆゑらし給
伊勢物語二條の后また春宮の御息所と申ける時氏神にまうて
まうて給けるに近衛府にさふらひける翁
大原やをしほの山もけふこそハ神代の事も思ひいつらめ
とて心にもかなしとや思ひけんいかゞ思ひけんしらすかし

少女　花宴　けふ南殿桜宴あるを

二月廿日あまり南殿のさくらの宴せさせ給

南殿桜　宴　紫宸殿　は紫宸殿の巽角にあり是大略也　創り

此樹や　貞観の枯しかとも根より萌芽を生し所

なる年新殿にうつされ枝葉森盛なりし近衛府記にも弁

訓桜樹不続なりあり天徳に焼失のち康保元年十月

植られ侍りぬ枯同二季正月に又植られて三月花宴あり

安元の同一八年の秋之家樹一ハ西京より植栽られ侍ては

なくば焼亡に此度植られけるなり

花宴事

延喜十七年三月六日乙卯御記曰晩影常寧殿看花命實頼

令吹笛令一二人侍臣唱哥依召還清涼殿時東小廂参議保忠

朝臣侍殿上桜下施座召大内記紀平五内御書所勘解由次

官諸花橘磨権大掾橘正臣文章生藤原高観坂上雅庭

原高樹木令賦春夜翫桜花絶句邦基朝臣當幹千古

同預其座理年作序子二刻召紀平讀詩給文綿又補座

階前童上朝臣以下侍唱哥々召佐前介善行弾筝藏人所

藤原有時吹笙兼讀詩桂十兼弾琵琶保忠朝臣同々弾琴

吹笙夜深行保忠朝臣綿息所殊以女装束行近侍公卿飲盃

酒者数人延長四年二月十七日御記曰此日殿前桜花盛開仰

召文人卿用花宴昨暮被令召之候文人今日遣使召常
陸太守貞王親王左大臣右大臣有所煩不参申刻常陸大守
親王参入同刻作蔵人立倚子東又庭自小弟二間敷菅圓座
両三枚於小階南簀子敷内親王納言座桜樹下補庭西面為
文人座酉剋左衛門督藤原朝臣参議藤原朝臣着倚子令召親王藤
原朝臣式部参来坐庭仰令召文人即文章博士
三統朝臣民部大輔傳文朝臣右中弁大江民部少輔諸兼朝臣内
少外記所大内記橘正臣以下文章生以上七人参入仙花門着樹下
座給臣給紙筆仰令献題菅原三統朝臣進昇殿菅原朝臣
座前給之令書題目奏 花房白 蝶佚 仰又令上又召奏召々 桜繁春 日斜

仰以後所上為題又仰令探韻字右近権少将實頼探韻奉上
次親王以下執文臺探韻仰清平朝臣元方在衡維時尹甫等探
韻令就進中庭之眼内蔵寮給酒肴中納言藤原朝臣参入
仰令探韻其後召楽所管絃者四五人時々令奏音聲以助
謳吟及子剋終獻取文臺以三統朝臣為講師讀詩仰文人等
近朝臣下令講之後管絃欽奏吟詠不止仰常陸大守親王
弾箏中納言藤原朝臣弾琴及丑剋給親王納言以衣文人給綿
侍臣及楽所人等給疋絹賞之二剋入内仍退出度々花宴中ニ延長四年
例探韻以下尤相似 康保二年三月五日丙子今日有花宴事尋
其由緒去正月廿七日堀東柱桜樹南殿異角白砂埋根朱欄匝

桒墳月之間遂日鮮明上達部令留此一庭者慊ニ意自曰中
及夜半詠古詩誦新詩且以眺望且以飛觴而已但此行事
具陣記以下略記　干時少外記大江昌言維陳庭節記之同
三年二月廿二日少記云今朝立倚子於庭樹下即就花下座親
王公卿又移坐同樹下色羹絃行盃酌召為平親王令候座令
侍尹為臣折花挿王卿頭ニ且延光為臣執盃立名詠和歌已
剋入内公卿等退出　拾遺集天徳三年三月内裏ニ花宴せさ
せ給ひけるに

九條右大臣

桜花こよひかさしにさしながらかくて千とせの春をこそ經め

おりふしとれ　舞折節や　或説折節賦之
人毎にめでこそもてあそびしめぐらされ道のハ見すてん
かん侍りて文つくり給　探韻　各分一字謂之
見るおもしろからまるまゝにおめるおもかう　臆
嗚呼事とハ異なるむと云世俗語や　行幸ノ天　奥入同　あまとと知く書
称や
地下の文人召すハ　是音によみ人召しハ其の是名同や
文つかふの物次　吹節此下　云文人ども題給ひて多くをすゝめり
とし給ひし例をせしをとはすりあやしく座つきて進ハ皆退くるを
例例しるまり拙きにまよしるまり

春のうくひすさへつるといふまひ　壹越調　大曲　新楽

一名天長宝寿楽　春鶯囀　南宮横笛譜云昔善作此曲者

有唐大臣源信納言及臣隣式人未作此和漢所勅信納言以

此四令修習成康親王合以笛作於清涼殿前視之者無不感

位

袖の人を所をりてくる　髭舞袖や

柳花苑といふまひをいとおもしろくまひ給へはかむ

う給ひてめつらしき色にいり人ありて　或記云此楽舞　昌泰

の信三将来女敷や其姿如吉祥天女舞袖翻雪静乙之

賜御衣延喜延長例や

みそにあらめと見えす　偃月　或揚月

源氏の君の御をは講師もえよみやられすくことにすしのゝしる

内池をハと云へを略して池をハといへり見えたり　或説云廣士

氏人韻字を作よりて講師をよみあけるか云々今案

此義ふ年の人よ宮の講師を依てむかしの人韻字を不

読給ひ只秀逸なるを毎よみあけ侍るなれは此儀しのをよろ

東宮の女御の　東宮乃女御なり

んこうなくさひあへる者ぞ　霞ゆ一サウ

茂筆
大かたに花の姿を見ましかはつゆも心のおかれましやハ

なと密かに思ひを花そをきりめく風吹てに物ありけり心の色

とのくもりせ　に数や　又云傾
みをあらしに　万葉　詠懸　わきとふ節
郭あらしとをかし草ちいるもとを数しきまゝしくハすかがり
こゝてんの見えてとのみ気色より行へきた
欄説云おくし敵とハ扉や　万葉集云大殿　南殿也
三乃くちあきらり　紫微殿ニ小南へおもてとりしたる也
おりこまとはやより弟三間ほおもおも戸や　格子さし戸ニ
かくれ而て戸をあきらく　扇くまくなきうしろあこして万ほ女房
（久にまし）尓にしとくむへし武ハ母ゝきえらを見するなり
おおかの月夜ありおもりのうちまさとうちすして

（太にまし）かのとせんありきもこえぬ書けよのかかる月夜にまろくものれおもき　（佐保大）
いとんおハ気色し　同章　又嫗
またのや数ニし女人すうし給みとく　此系桁云此事君為妃
きこえ御とくいひまをらきれ知とハいふしもあらハさらつゝ
をはき斉れ数れ名まめりしきたきこえのちそをかりおりとい人
なまりとなし
源氏物語の中し女ミへいらくの数ニ桐壺云とい之まてお所返
条に女
うきこ身世よ風うく浦なる身をて草れ京をハとかしとや知りよ
とかしるん為おもきしあしハなのよれとらしる⊙てあらしとまうまき

まなのかすハさそこそましにく漢の楽しハ由つゝれしとうら
こゝろなりまた深き理ありくといひけりやゆるし由てゝ
りうなり
いはれるよ露の蔭をかりそめにさしたる京に風をふき人
とありけれハいさゝなきといへるんわるゝれわかるゝなる
へしと漢ながらしかあらそハさそなしといふなと
つらしろひ侍て　寂　少宮お
此中将乃すさめぬ花の君あるとなり　不肖　日記　すさめぬ花とハ
あるし
山里に人もすさめぬ桜花いつくをみるわかれをやさむ

おほあらきの森の下草おいぬれハ駒もすさめすかる人もなし
是ハ人々すさめてすさむとハ愛する心なり　又すさ
めといふ心なり
さてかたち大人さゝ海を　言　かまくら
海のみのあまりなりさ海こよろきのいそのあまりてやしと
家なりとなりのあまりの事や
かのしほしなりのときハ桜の花のさかりに人のこゝろこれかなしめる
月をりらしくれまうつしつる人々も人なし　清少納言　枕草子
おほありし其物三つなるもなりのさかへまかりぬ是ハあまりあつく
くこし

橘廣の安守なり三枝てとうるまてこて以ゐく以奈はく
よりて大人におもひむるひに給ひてあしたかたわりま室
廣間の滝や
さうれとをまさめけて風にてかくしぬる取えかくてしとうつひ
まうひて ぬるまかをりひぬるめや 波良多 万久良や波良加
耳ぬ波を波奈久天指や左久安津未波万し天留波しえ
加左良波や波ふ夂能仔知命か比尓加矢久津加波し千加仔
能保曽こふ平可二乃左こ波ふ天宇波毛乜わふ 天義や
知土波矢 但馬ホ貴川律
こゝらのよもひらりあめいにうれるの代に代よおは侍まし。

此四代帝王或は国文武成康に擬せられしものあり
弘安源氏論議にも貞信公の君臣のけありしより釈行説是に
同し桐壺帝を延喜に准とえ 陽成 光孝 宇多 醍醐
あるべきこそ
元慶四年誕生あすは延長ほとくとて小四代之干時左大臣
なりむ比撰するにゐありし又はいは延長八年九月廿二日朱雀
院受禅日家国に語とおもし此川入大臣も澪標巻以前
摂政の号なきこそ
延喜の比代ハ内覧臣ハくりかく無関白号や忠明おは大
忠仁公のおもうけありしと以空不審也

まことに二なりきくに　考課令曰凡官人の遷延ハ功課應

附考者皆須實録疏曰遷延者京像や行言状延や

あるハうき心やさらくえ侍りけり　一位綮　兼良

おきなをとあしくまいりて猶へく　孫こ

おかや多をとへむものしとしを　許やむとへいりし上手なら

かとも、おほやけましこハ一凡也るかたましくすとやなれと

見えけり

さた格く書ありあらいてさを行つまりハ世なれいかりくいや行

まし

たこ
今すり　あを穢とむりしハかとこ山さら格く沙よありこ物を

水原抄曰行奇遅延文兄任定或ハ承従不者ゆへとことを

けるなこし　介宗面賢樹其ハ石寛石祥ルは事必従行

なよひ比以日又こ北おもし北格くのけらす　弓結や

踏奇後宴　弓結や　延長七年二月廿二日内記云踏掌所

奉仕踏奇後宴云こ内射場中務卿親王左大臣以下仍召公廊

上公卿出預石立唇別如例内賭物臣下賭

なかて落花えんし行ふ　花香令落花宴有與　延長二年二月廿日

廿日左大臣於花香令　ころかとるお結ふ三月中北十日そうりに落

花下有獻物事こし

并比家り落乃花北賀し行

かくれちりおんとやそしつらまへすら前ん

たと
大内人も守ミ山さとの桜花かくれてのちそさかまし
家つゝみれけるに　弘徽殿女院の御陵の宮道や
とのゐ人も物して此子は若人か物をもつ行　光之　堂　白
れけるひなとひきつくりけく　拾ゐ行拾ゐうち以下拾云
男女装束物名や云々
さくらかさね桜かさねとひらめきかさねいろ
くひきて又さくらのあさねあるは物かさねとハ唐
侍やうすきこきあやあり
直衣布袴文　小右記　寛和元年二月十三日乙卯上皇駕法
車今出京地行　左右兵相　大納言為光　左大将

朝光　右大将　済光　暁礼　中納言文範　布衣　権中納言　顕光　重光
保光　散三位　義懐　右兵衛督
参議忠佐　布衣　公季　布衣散三位　右中将道隆　布衣
公卿皆直衣衣下襲以桜指貫　正暦御堂之
行曲水宴之行　扉云達　衛之　時令着此装束紅梅織物直
衣之回知之院入左殿讀絶云々　勘文云此日御堂関白
紅桜比直衣ヲ火色比下重とひとつ行火色ハ裏面ヲ地の中
倍ヤ御やうに云々　小右記　正暦年中賀茂祭権蒐以堂一丁眼為
左大臣之時内大臣公季此装束云々　又三十條談合要
寛治根合之時判者輔親卿直衣下襲　用彼云々　永長

関白京極大閤此宮白九大臣俊房是也　古文讀云知足
院殿云作けるハ御堂宮治殿大殿北御局近よ一事也不違
内手宮養流自執筆未皆之出事以也衣布襟と云紫宸
とせさりしめ給し紫宸殿是事よハカ文事之
此等記源氏物語以後事や紛る有識不為定存先例記仍
ぬ間色裁しるや
あさきてまつかりこそをすかさこれ　鮮　論語　鮮　宿　日本紀
宿老　日
是はいお巻ニ注こう　此字中鮮字可宜哉名さまこれ義記宿老
然も是甚謂守出衣布襟宿老人すまし也見中右記源

氏雖兆宿老依ねる者共之歌ありつるこそハ主の字なりれ
古今集にもとよりてこそおもひこそくもれありけるを君すてあり
いにかはしいつれ　寵 イウ　巌 イワホ　いさかりつくらん
女一宮女三宮おそしまん　古今徽殿女御の詩服や一段
行へ何よしかる夢笑にこ抱女三宮ハ蒼寒よ為秋院
ひんつし此とそちよおりして　妻戸口記妻戸のことせりさ行へ
いとあさましハすう
あさりしかつれ　不祥　日本紀
かしこきまとこれハおまへよてうかけよしかくさを　行ハめとく
伊物
さく花の下すか随ふ人おもひこそおりしにゆきふ蒼此あけりも　業平

ことひさく侍り　ことひとなかりハつきなみの詞なり
よかしみ人へなり御人とあるき抔ハかたこち侍るを　不平(ヨクモアラス)　思ふ化
源氏六乃君をえさしめんとて人々をむきみまへハいふなり
御人すしかき抔りとハ源氏のいまもそ氏文へられけり
まれ哉や
わするゝなと返らくかへるきぬを見ゆとわかちとるもろき事文よ
ゆひかりてよりかけ行(まし)ハあやまりうたと哉る今なりこし
終る人なとはふハなしぬ人なるへし　侍し加波紙ヒ未ウ
以下於比年也良於天可良文久以須以比須留二凡　侍可
奈留以於奈留於比曽波奈太乃於比紙祭可波多侍紀

太留三凡可や留尋加能留奈可　侭る示石川呂
わすれ抔し入さ化乃れまよふおかれ君乃月乃りけやし抔なし
例見月　岡(ホカ)尚書　或髣髴
あつさちつ御さ北山ハ鶴そう北あつうとなや追ふまなうらん
んりにかよむしぬるはちそり北月なるさ空乃ゆよハましやハ
又云　一旁曲　一旁生

日本政府圖書
大日本帝國圖書印
内閣文庫
内閣文庫
内閣文庫
冊数 53 枚
国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan